説教20220213一コリ3:1-9マタイ5:21-30「水の漏り始め」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

先日の木曜祈祷会で、私たちは詩編14編より、「主なる神のおられるところで、正しい人々の群れが生み出されていく」という学びを致しました。その姿は、今のこの教会のことをも言い表しています。私たちはイエス様という御言葉によって集められ、御言葉によって教会は成長させられていくのです。

では、御言葉によって成長する教会の姿を、私たち人間の目から見ればどのように映るでしょうか。それは全ての人が、イエス様を見つめて、協力して一致して働いている所でありましょう。ところが教会の実態を見てみますと、どこの教会でも多かれ少なかれ、「お互いの間にねたみや争いが絶えない」状況なのです。そのことをパウロは、教会員が「相変わらず肉の人だからです」、と理由づけしています。。相変わらず肉の人で、霊の人になり切っていない、というこの実態は、私たちがこの世で肉を携えて生きている以上、この世を去る時まで続くのだと覚悟した方が、私たちにとっては得策なのかもしれません。また、だからこそ、私たちは日々霊の人になれるように祈りながら、自分の霊性を高めていくことが大切になってきます。

パウロは、コリントの教会が霊の人になることを妨げている要因として、偶像崇拝を挙げて、教会員が偶像崇拝におちいることを厳に戒めています。偶像崇拝の禁止は、主なる神の十戒の一番目に、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」とうたわれていますが、もちろんパウロはこの十戒を遵守しているのです。ただし、パウロの口を通して語られる戒めは、肉の人に対するように、具体的で身につまされることです。コリントの信徒への手紙一3章 6節、「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。」皆様、この聖句は、暗記されている方も多いのではないでしょうか。私とはパウロ自身のことであり、この聖句は教会の成長を植物の成長に譬えて語っています。この聖句は人々に何を語っているかというと、私パウロや、アポロと言った人間に注目するのではなく、目には見えないが働いておられる主なる神に注目しなさいという事です。つまり、この聖句は、私たち人間が、人物崇拝という偶像崇拝におちいりやすいという事を指摘した上で、そうではなくて見えない主なる神をこそ崇拝しなさいという事を説いているのです。次の７節も同じ事の繰り返しです。新共同訳の「大切なのは」というのはギリシャ語原文にはない補足ですが、７節を直訳しますと、「植える者もなく、水を注ぐものもなく、有るのはただ成長させてくださる神だけ」という、パウロのきっぱりとした自己否定の表明なのです。なぜ、パウロはここまで厳しく自己の存在を否定したのでしょうか。それは、パウロがコリントの教会で「わたしはパウロにつく」などと言われて偶像扱いされていたことにあります。パウロは人物崇拝の罪を重々承知いていましたから、このように自らが偶像崇拝されることはもってのほかであり、赦されざるべきことであり、主なる神が忌み嫌われることであることを知っていました。その上、この偶像崇拝の一因が、まぎれもない自分自身のこの存在である、ということに思いを致す時、パウロは自分の存在を消したいと心から願ったことでしょう。せっかく愛するコリントの教会に再びやってきて、その成長ぶりを喜ぼうと思っていたところに、偶像崇拝して分裂している人々の姿を見、更にその原因が、姿を現した自分自身にもある、という事を知ったパウロは、まさに主の御前に、悲しみと懺悔の思いをもって「植える者もなく、水を注ぐものもなく、有るのはただ成長させてくださる神だけ」と申し述べたのでありましょう。

偶像崇拝というのは、私たちに絡みついて来る罪であります。偶像崇拝というのは、仏像を崇拝しているといったようなわかり易いことだけではありません。例えば教会の中でも、知らず知らずのうちに信徒が牧師を偶像扱いし、また牧師も偶像扱いされることを受け入れてしまう、と言ったことが起こりえます。偶像崇拝は、無意識のうちに私たちの思いに宿り、それは知らず知らずのうちに膨らんで大きくなっていきます。ですから、私たちも今日のコリント書のパウロの口による戒めを、自分たちのこととして、きっぱりと受け止めていく必要があります。

さて今日の説教題は「水の漏り始め」ですが、これは、箴言の 17章 14節、

「いさかいの始めは水の漏り始め。裁判沙汰にならぬうちにやめておくがよい。」から取られています。。この水というのも偶像崇拝の対象になりやすいものの一つです。私たちは　「わたしは植え、アポロは水を注いだ。」などという文脈で語られますと、つい、水の力と清らかさを絶賛し、その水に対して讃美礼拝してしまうという罪に陥る傾向を持っています。それに比べて箴言の「いさかいの始めは水の漏り始め。」で語られる水のイメージはどうでしょうか。。人間関係にひびが入って、その割れ目からいつの間にか、液体がにじみ出していて、そうこうしているうちに、その割れ目が大きくなって、気づいたら大水が流れ出してきて、あっという間にそれに飲み込まれてしまった、という情景を思い描くとき、そこにある水は、人の命をも奪う、海のような混沌以外の何物でもありません。つまり、水というのは、私たちが手放しで称賛して崇拝できるものではないし、時には、私たちが忌み嫌うものへと、その姿を変えるのです。ですから、私たちは決して水を偶像視せず、水をこの世における不可欠の一被造物として冷静に重んじていく、といった態度で臨んで参りましょう。

偶像崇拝のこわさは、私たちが、偶像崇拝によって自分たちの思いをコントロールできなくなり、自分たちの思いが暴走してしまうというところにあるでしょう。それは、私たちが思いによって罪を犯してしまう、という事に至ります。思いによって罪を犯す、とはどういうことか、そのことをイエス様は、今日のマタイ福音書の箇所で詳しく述べておられますので、聞いて参りたいと思います。

イエス様は言われます。「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。」

そして、「「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」とも言われます。

『殺すな。』と『姦淫するな』とは、どちらも十戒からの引用ですが、この十戒の戒めは、私たち人間の行いの罪についての戒めです。一方で、兄弟に腹を立てる、或いはみだらな思いで他人の妻を見る、という事は思いの罪であります。イエス様はこの時、歴史上はじめて、私たち人間に対して、思いの罪という事に、はっきりと触れて、戒められました。なぜならレビ記のような律法の世界では、思いの罪を十分に戒めることが出来なかったからです。律法主義というのは、律法学者たちが陥った一つの罪ですが、そこには、思いの罪をも、律法によって裁こうとする、的外れが潜んでいます。例えば、農夫が落ち穂を残したのは、貧しい者や寄留者のためであったどうかなどといって、農夫の心の思いに立ち入る事は、レビ記などの律法の条文によるだけでは裁き入れないことなのです。イエス様は、そんな不完全な律法の世界に、新たな御言葉を加えられました。。その新たな御言葉が、「しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。」や、「しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。」の部分です。「しかし、わたしは言っておく。」とイエス様が言われるのは、これから私がいう事は、律法の書から引用ではないという宣言です。イエス様は、この時、引用ではなくご自身の口から全く新しい律法の御言葉を語られたのでした。

さてこの新しい御言葉というのは、実に生々しくて、私たちの日常生活に即した戒めだと思われませんか？私たちは折にふれて、腹を立て、心の中ででも「バカ」とつぶやき、みだらな思いを懐かないでしょうか。私たちはこの世を去る時まで、肉の人として日常生活を歩む者ですから、このことは避けて通れないでしょう。イエス様も、このことを私たちに戒めながら、だからと言って、レビ記のように、「何々してはならない」調の戒めで語られたわけではありません。イエス様はご自身も一度、肉の人になられたのですから、そのイエス様の口を通して語られる御言葉は、私たちに受け入れやすい律法であります。将に、イエス様は、私たちの胸の中に律法を授け、私たちの心に律法を記そうとされているのです。では、イエス様が私たちに新しく授けられた律法というのはどういう事なのかを見ていきましょう。

イエス様は、私たち人間に、「兄弟に腹を立ててはならない」とか「みだらな思いで他人の妻を見てはならない」というような律法の言葉づかいを用いて戒められることはありませんでした。その代わり、イエス様は私たちに、全く別のこと或いは反対のことを行う様に勧告をされています。それは、次のような御言葉によって言い表されています。一つ目「まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。」、二つ目「あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。」、三つ目「もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。」、４つ目「もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。」です。

このイエス様のこの４つの御言葉は全て、私たちに「何々しなさい」と言って行いを促す御言葉であります。ここに古い律法の語りである「何々してはならない」調とは正反対の大きな違いがあるのです。この積極的なイエス様の語り口は、つまるところ、汝の神を愛しなさい、そして、自分を愛するように隣人を愛しなさいという、いわゆる愛の律法に集約されるのですが、今日の箇所はそのイエス様の愛の律法の、現場に即した具体例と言ってもよいかもしれません。

さてイエス様のこの４つの戒めを聞いて、思わされるのは、どれもこれもとても私たちには重い言葉だという事です。水が漏り始めた人間関係を修復するのは至難の業ですし、右の目をえぐりだすなんて決して実行できることではありません。では、イエス様は実際問題、私たちに一体何を行いなさいと勧告しておられるのでしょうか。。それはすぐにわかることではありませんが、今日は一つの解き明かしをしておきたいと思います。イエス様は律法の語り口に加えて、明らかに知恵の書の語り口を加えておられます。知恵と言っても人間の知恵ではなくて神の知恵ですが、その神の知恵は、箴言やそして詩編にも多く言い表されています。。私たちは隣人を愛する時、ただ情けよって愛するのではなく、知恵を使って愛することも必要です。パウロは知恵の御言葉を用いて教会員を諭し、愛しました。知恵の御言葉は私たちのすぐそばにいて、私たちの行いをその都度、導いてくれることでしょう。私たちはそうやって肉の人であることを止め、霊の人へと変えられていくことでしょう。

祈り

憐み深い父

あなたによってつくられた私たちは、あなた無しでは存在することが出来ません。しかし時に私たちはそのことを忘れ、激しい思いに駆られて自分自身を消し去りたいと思ってしまうこともあります。どうかそんな私たちの思いをあなたの御言葉によって治め、導いて下さい。あなたの知恵によって私たちが愛し合うことが出来るようにしてください。

この教会が建てられてから111年の歩みを、あなたが守り祝福して下さったことに感謝します。あなたによって集められ日々、霊の人へと変えられていく私たちが、とこしえに聖霊の親しき交わりを保っていくことが出来ますように。

あなたがおられるこの教会は、次々に新しくされた人を生み出していくことがおできになります。私たちは肉の思いを捨てて、ますます霊の人となって、御国へと続くこの教会の為に働いていくことが出来ますように。

この世にあっては、私たちの間に争いごとが絶えることがありません。小さな行き違いが大きな戦争へと発展してしまうことも数知れず起こっています。私たちの手には負えない欲望や嫉妬の思いを、あなたの御言葉によって清め、解決してください。暗い絶望のふちから立ち上がることが出来る御言葉を私たちにお与えください。

父と聖霊と